



槻
2016
第 21 号

千曲川地域の人と文化



NPO法人上田図書館倶楽部 2016年1月



上田城跡

N H K 大河ドラマで「真田丸」の放映が始まった。真田氏の築城から400年余り、真田三代の史跡に脚光が当たる。雪の中櫓門をくぐるカップルが正面真田神社へと消えていった。暫くして賑やかな声、観光客の集団が訪れたらしい。観光ガイドの語りに耳を傾けながら、本丸跡を巡っていく。東虎口櫓門を構える石垣には真田氏の象徴、大石が積まれている。市のシンボル上田城跡、新時代に期待が高まる。

表紙写真・文 矢幡正夫

contents

- 4 セカンドライフを楽しむ ----- 伊藤文子
「知」と「動」でアクティブに ----- 窪田律子さん
- 8 知られざる日本古代史④ ----- 酒井春人
海人族安曇族と古代日本列島
- 12 地域に根ざすNPO紹介
NPO 法人 やまぼうし自然学校
- 14 信濃を旅した文人たち ----- 海野 郁
若き日の鷗外と上田
- 18 ぶらり散策 ----- 萌
大蔵京古墳を訪ねる
- 19 上田情報ライブラリーは今 ----- 望月聰子
「真田氏の真実にせまる！」
～第8回 考古学からみる上田城～
- 21 波紋 ----- 木漏れ日
- 22 観点 ----- 岡田基幸
イタリアの街角
- 24 あとがき

セカンドライフを楽しむ



「知」と「動」でアクティブに 窪田律子さん

これまでに登った深田久弥の『日本百名山』は84座。週に2回ほど市内の太郎山に登るほか、県内外の里山でも汗を流す。上田市中之条在住の窪田律子さん71歳は、細身の体型からは想像できないパワーの持ち主である。

知的好奇心にもあふれている。38年間勤めたNTTを退職後、シニア向けの大学三ヶ所で、計9年間学んだ。並行して社交ダンスを10年以上、自ら楽しむ傍ら、初心者の指導にも携わる。半年前からは民踊舞踊も始めた。「知」と「動」の活動範囲の広さに驚くばかり。元気の源はどこから?

Q お聞きしたいことがたくさんあるのですが、まず登山からお聞かせください。山はお若いときから登つていらっしゃるのですか。

A 20歳ころ井上靖の山岳小説

「氷壁」を読み、主人公に惹かれて山に憧れるようになりました。就職したNTTに登山クラブがあり、そこに入会して初めて登ったアルプスが白馬三山だったのです。白馬岳はお花畑で有名な山ですが、7月下旬の風景は最高でした。雄大な眺め、崇高な雰囲気、足元には可憐な高山植物、味わったことのない感激でした。同時に、自然の中に溶け込んでいるような一体感に満たされました。

仲間に恵まれて。山は危険を伴うので単独行はしないと決めていましたので、山仲間との出会いはラッキーでした。とくに太郎山で知り合った女性は、私より一回り以上も年上だったのですが、日本百名山を踏破されていて、「わたしもいつか」と目標にしたのです。もう

ひとり影響を受けた小諸の女性は、単独で100名山を踏破されていて、「一緒に登つてあげるよ」と言われたのですが、ガンで亡くなられてしましました。彼女たちとの出会いが、百名山を目指す大きな動機になっています。

Q 実は私も白馬岳の花畑がきっかけで山に登り始めました。あの美しい風景は今でも印象に残っています。それからあちこちの山に登られるようになつたのですか。

A そうです。北海道から屋久島まで行きましたね。気の合う山残つて

A たくさんあり過ぎて……。

「百の頂に百の喜びあり」とは深田久弥の言葉ですが、思い出がいっぱいです。アルバムも山の写真が多いです。鳳凰山では天の川を見ることができましたし、槍ヶ岳ではブロッケン現象（雲海に映る自分の影の周りに虹色の光輪が生じ



駒ヶ岳山頂にて



しつとりとした着物姿

ています。樹氷を見たこともあります。

旅行に行つたり食事に行つたり。

今は丸子春秋学園の歴史コースを受講しています。主に日本史ですが、歴史上の人物に焦点が当たられ、わかりやすく解説してくれます。退職後、シニア向けの大学に通われたとか。

Q 暗いうちから登山、窪田さんの意志の強さが見えてきました。ハプニングも數え切れず（笑）。

A 食事はできるだけ体にいいものを食べるようにしています。体力維持に週に2回ほど太郎山に登っています。朝5時から登り始めて7時には家に戻り、それから朝食です。体調も生活リズムも快調です。太郎山にも四季折々の自然現象があり、小さな感動を味わつ

るので、いい時間を過ごしています。

Q 次に社交ダンスについてお聞かせください。

A ことぶき大学に在籍中、午後のクラブ活動でダンスクラブに入会したのがきっかけです。もともと体を動かすことが好きで、だん

に卒業しました。社会意識や健康、趣味等についての講座でしたが、とても有意義でした。学ぶ習慣ができたのも良かったです。それと知り合いが増えたのが何よりでした。彼らとは今もお付き合いが続いている、



優雅に踊る窪田さん

だん音楽にのって踊るのが楽しくなり、本格的にレッスンを受けるようになります。以後10年間ほど

続けています。美しく優雅に踊りたいと、いつも考えながら踊っています。ワルツからはじまりモダン系・ラテン系と種類が多く、奥が深いのですが、覚えることが樂しいです。今は続けていて良かったと思っています。

Q　どのような点においてですか。

A　姿勢ですね。体幹を使いますので猫背防止に役立つていると思います。椅子に座つても、背もたれに寄りかからぬ癖がつきました。

Q　毎日アクティブに過ごしてらっしゃるのですね。お元気の秘訣

定期的な講座だけでなく、単発でも興味のあるテーマには意欲的に参加する。体にも精神にも体幹

を教えてください。

A　生きがいと思える本当に好きなこと、山とダンスを楽しみながら、少しは人の役に立つているかなと思える気持ちの張りかもしれません。

Q　感服するばかりです。最後にこれから抱負を。

A　健康を維持しながら残りの百名山16座を踏破したいですね。ダンスもうまくなりたい。でも目標を達成したいという気持ちと、目標に向かっている今を少しでも長く楽しみみたいという気持ちが交錯しているんですよ。矛盾してますね(笑)。

平成27年11月10日訪問

伊藤文子

が通り、趣味と学習を両立させている窪田さんはとてもかっこいい。人との出会いを大切にし、日々目標に向かって活動している窪田さんはから多くのことを学んだ。とくに「人との交流が活力を生むのではないか」そんな思いを強くした。



知られざる日本古代史④

海人族安曇族と古代日本列島

安曇族研究会会員 酒井春人



玄界灘に浮かぶ安曇族の本拠地志賀島

歴史上から消えた安曇族

福岡県志賀島は安曇族の本拠地として名高い。島の入口には志賀海神社が鎮座している。しかし、この場所は後に遷座した場所であり、当初は島の北端勝馬の地に、表津宮・仲津宮・沖津宮の三宮によつて祀られていた神社である。

そこを訪ねると、ちょうど宗像大社が沖ノ島の沖津宮、筑前大島の中津宮、宗像市田島の辺津宮と三宮によつて祀られているのと同じ形式をとつてゐる。

安曇族の祖神は前にも記したが、綿津見三神（表津・仲津・底津）であり、宗像族は宗像三女神（田心姫神・湍津姫神・市杵島姫神）である。いづれも海人族系の神々として知られてゐる。

志賀海神社の宮司は代々、阿曇姓である。ところがこの阿曇姓は

不思議なことにこの島には宮司の家以外一軒も存在しない。さらに阿曇あるいは安曇姓を名乗る人は、全国をみてもごく僅かしか存在しない。逆に宗像姓あるいは、同じ海人族系の住吉姓は全国に数多く見られるのと正反対を成している。

また、志賀海神社は『延喜式』に記載された名神大社の格をもつていたが、その後官幣小社となり、現在は神社庁の別表神社となつてゐる。一方、宗像あるいは住吉の神社は、ご存知のように両者とも大社をもち、全国に数多くの末社が存在する。

このことは同じ海人系でありながら、ましてや日本神話で神武天皇を生んだ綿津見神の娘の存在を明記しておきながら、綿津見神を祖神とする安曇族が歴史上から何

らかの理由で、消し去られている
ように思えるのである。

ここに安曇族の謎が存在する。
日本の誕生に多大な貢献をしたと
考えられる安曇族が、歴史上から
消えたのはなぜかをさまざまの角
度から探していくと、私たちは
全国の安曇族研究者と連携しなが
ら研究を進めている。

君が代のルーツ

ところで志賀島の志賀海神社では毎年春に「山嘗種蒔漁獵祭」、また秋には「山嘗漁獵祭」という例大祭が催されるが、注目すべきは、この祭礼の中で「君が代」が神楽歌として披露される。以下その詞の全文を掲げてみよう。

香椎路に向いたるあの吹上の浜千代に八千代に今宵夜半につき給ふ御舟こそたが御舟になりにけるあれはやあれこそや安曇の君のめしたまふ御舟になりけるよ

この詞は、代々受け継がれ、かなり古くから奏上されてきたという。まさに「君が代」のルーツと



表津宮跡



仲津宮



沖津宮

「我が君は
千代に八千代
にさざれ石
の巖となり
て苔のむす
まであれは
やあれこそは
我が君のめし
の御舟かや
志賀の浜長き
をみれば幾
世経ぬらむ

ねていただきたい。

金印の出土地

国宝「漢委奴国王」（かんのわの

なのこくおう）と刻まれた金印は、

この志賀島で発見された。江戸時代の天明4年に地元の農民秀治・

喜平が発見し、それを農民甚兵衛

が奉行所に届け出たとされてい

る。この発見の経緯はこれまでさまざまに伝えられ、いくつかの説があるが、現在志賀島には金印出土

土地の公園が存在する。

この金印は、紀元57年、後漢の光武帝が奴国（なごく）の使者に下賜したとされる金印にほぼ間違いないとされる。つまり当時、現在の福岡あたりに存在した奴国が後漢に朝貢し、その時にもらってきた金印であるとされる。このときの様子が、

中国の史書『魏略』や『晉書』な



志賀海神社境内には1万本に及ぶ鹿の角を納めた蔵がある

言つていいだろう。

玄界灘を越え、志賀島にたどりついた吳国人々・安曇族がその後、日本全国に弥生時代の文化を広めていく。『古事記』や『日本書紀』に記された神話が、どうもこの島で起きた事実を反映しているよう私には思える。古代ロマンに彩られたこの志賀島を一度は訪



金印出土地を記念した公園

とに書かれているが、奴国の使者は、光武帝に「我々は呉国の使者者太伯の後裔だ」と述べたと記載されている。

太伯は名君と言われた周（紀元前1046年頃～紀元前256年）の古公亶父の長男で、末弟に家督を譲り、当時荊蛮（中国長江流域の野蛮な人たちが住む）の地と

呼ばれた地域に呉国を建国した人物である。人徳に優れ、呉国は繁栄した。その呉国の子孫が北部九州の奴国の人々であるという事実

こうした背景を考えると、安曇族と呼ばれる海人族が日本に渡来し、奴国を建国したと言えるので

さしく大石を目印に隠されるようにしてあつたと思われる。



図 志賀島全図（志賀島歴史研究会理事岡本顯實氏作成）

「志倭人伝」にも登場する)が何らかの理由によつて滅びたとき、大事な金印を玄界灘に浮かぶ志賀島に隠匿したと考えられなくはない。

金印が発見されたとき、大きな石の下に石で囲まれた箱状の中にあつたと言われてゐる。ま

NPO 法人 やまぼうし自然学校



ど ういう目的のN P O法人でしょうか。

自然や環境への理解を広く一般に普及させるための事業を行い、それによって森林の再生と21世紀の新たな森林文化の創出及び次世代への継承を目的として設立しました。

「森でつながるいのちのわ」をキャッチフレーズに、森に関わる様々な活動を通じて、命をささえる森が発信するメッセージを享受できる感性をもつ「ひと」づくりに力を入れています。

具 体的にどのような活動をされていますか。

大きく以下の4つの事業を行っています。

(1)「自然体験・環境教育事業」では、首都圏の小中学生の林間学校のプログラム提供と、地域の子どもたちと「森でモリモリ遊び隊」を実施しています。遊び隊は毎月1回（土曜コース、日曜コース）で、森で思いっきり遊んだり、キャンプを通じて「時間・空間・仲間」地域の良さを感覚的に知ってもらう活動を行っています。

(2)「森林の総合利活用推進事業」では、森林整備で伐った木のクラフト材料利用や薪利用、四季折々の森の恵みを利用したイベントを開催しています。他にも地域の育成会行事のお手伝いや、自治会行事への出前、森に関連する行政のイベントへの協力も行っています。

(3)「指導者養成事業」では、子どもたちの活動を広めるために必要な人材の養成を行っています。

(4)「成果普及事業」では、主に上高地白樺自然学校のガイド派遣を行っています。

社 会にどういふことを伝えたいですか。

イベントや事業を通じて、本当の意味での「豊かなくらし」を考えるきっかけづくりができるといいです。森や自然のすばらしさ、大切さを感じる感性や、人とのつながりの大切さや必要性、感謝の気持ち。いろいろなものや事がつながって、本来の豊かさは実現するものだと考えています。

基 本情報

活動開始時期：任意団体として活動開始 1994 年、NPO 法人認証 2000 年

会員数：約 200 名

活動資金：自主事業の収益

職員数：長野校 6 名 (+ 育休 1 名)、東京・埼玉校 2 名、新潟校 1 名

事務所：上田市菅平高原 1223-5751

ホームページ：<http://www.yamaboushi.org/>

理事長：代表理事 加々美 貴代（きよ）

霜柱がたつ田圃に現れた幻想の世界。新たな希望を象徴するかのようなお日さまのリングの輝き。ウォーキングの人が影法師のように現れ消えていく。



信濃を旅した文人たち

（若き日の鷗外と上田）

森鷗外は、生涯にわたつていくつかの日記を書き遺した。

若かりし頃の日記『北游日乗』と『みちの記』によると、鷗外は上田を2回訪れている。

明治14年12月、鷗外は19歳の若さで陸軍軍医副になり、東京陸軍病院勤務となつた。翌年、徴兵検査立会いのために栃木、群馬、長野、新潟の4県を回つた。その折の日記が『北游日乗』で、鷗外の日記の中では最も古いものとされる。

2月13日に東京を出発した鷗外は、2月24日に長野県に入つた。

や旅館

（注）原文では、そ麥の「そ」は草か

（注）鶴屋は旧軽井沢銀座にあるつるや旅館
（注）原文では、そ麥の「そ」は草か

「山を下れば軽井沢なり鶴屋（注）にてそ麥（注）を食べつ馬車を倩ひて沓挂仮宿を過ぎ追分に至りて油屋（注）に宿りぬ

二十五日 晴れたり馬瀬口のう

まや路さして浅間山の麓を遡る

これより芝生にて古松おほき道に出づ小室なる和志屋にて昼餉たうべ田中を経て上田に着きぬこよいひの宿は植村（注）といふ家なりき

上田では、海野町の上村半左衛門の宿に2泊した。2日目、若き鷗外はどのように過ごしたのだろうか。26日の日記には、「晴れたり」とだけ記されている。

（注）油屋は軽井沢町追分の油屋旅館
（注）植村は上田市の海野町通り、高市神社裏手に建つ旧上村旅館
んむりに收



現在のつるや旅館。
旧軽銀座はずれに建つ

ところで、長野県に入る前日の23日にはこんな記述がある。

「安中の駅なる山田屋という家に宿りぬいと物淋きところなるに冴え渡れる月破窓を洩りていも寐られず洋行せし友の事などおもひ出でゝ羈官吾飲寒山馬得意人攀絶海

船などうち吟ずるほどに暁近うな意の人は絶海の船に攀づ

官務で旅行中の私は淋しい山の中で馬の世話をしている／渡独の願いが叶つた友は意氣揚々と遙か洋上にある」

得意の人とは、鷗外と共に東大医学部を卒業した親友の三浦守治だ。首席で卒業した三浦は、この年の2月4日、文部省派遣の官費留学生としてドイツに旅立つた。留学を切望していた鷗外は、羨望の思いを抱きながら友を思い、安中の宿で眠れぬ夜を過ごしたのだろう。

りぬ

文中の漢詩は、この頃の鷗外の心境を窺えるものとして、『北游日乗』の中で最も有名なものだという。

「羈官の吾は寒山の馬に飲み／得

う。その鷗外も、2年後、陸軍二等軍医としてドイツ留学へと旅立つ。留学中の生活を書き記したものがある。『独逸日記』で、さまざまな体験は帰国後の作家活動へとつながっていく。

4年後の明治21年9月8日、鷗外は帰国。4日後、鷗外を追つてドイツ人女性エリーゼ・ヴィーダルトが来日、築地精養軒に滞在する。驚いた森家では、鷗外の妹喜美子の夫・小金井良精や弟篤次郎が説得を重ね、エリーゼは10月17日に帰国した。そこには軍部の動きもあつたとみられている。欧州の自由な空氣にふれて帰国した鷗外だが、明治の家制度における長男の立場、軍部の重圧など、日本での現実は思つてはいた以上に厳しかつたのではないかだろうか。

鷗外の思いを断ち切らせるように、周囲は結婚を急がせた。帰国から半年後の明治22年3月6日、鷗外は海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚。同時期には文学活動を始め、23年に『舞姫』、『うたかたの記』を、翌年1月に『文づかひ』と、いわゆる帰朝三部作を発表していった。



旧上村旅館(大正時代に改築。上田のすてき文化賞受賞)

車のいざるにつれて、
葉はまばらになりて桔梗の紫なる、
花の赤なる、
花の黄なる、
花の芒なる、
蝶一つ二つ翅重げに飛べり。
まだ深き霧の中に見ゆ。
ゆくに霧晴る。夕日木梢に残りて、
またここかしこなる断崖の白きところを照らせり。た

エリーゼについて、名立たる学者が論議を重ねてきたが、近年になつて有力な説が浮上。ベルリン在住の作家・六草いちかさんが、2011年『鷗外の恋』舞姫工芸の真実』を、その後『それからのエリス』いま明らかになる鷗外「舞姫」の面影』を上梓した。

鷗外が再び上田を訪れたのは、その頃のことである。今回の旅は、いわゆる帰朝三部作を発表していった。

この旅の日記が『みちの記』である。滞在先や道すがら、鷗外は風俗や習慣などを仔細に観察、時に批判の眼を向ける。反面、自然の描写は抒情的で美しい。

文中からは窺い知れないが、この時、鷗外は妻との間に大きな悩みを抱えていた。帰京後、9月に長男於菟が生まれるが、10月には家を出て離婚している。僅か1年半ほどの結婚生活であった。

この旅の日記が『みちの記』である。滞在先や道すがら、鷗外は風俗や習慣などを仔細に観察、時に批判の眼を向ける。反面、自然の描写は抒情的で美しい。

ちまち虹一道ありて、近き山の麓より立てり。幅きわめて広く、山麓の人家三つ四つがほどを占めた。火点しごろ過ぎて上田に着き、上村に宿る。』

鷗外研究家でもない六草さんだが、地の利をいかし、教会や州立公文書館などで気の遠くなるような調査を重ねる。結果、エリーゼの足跡を見つけ出し、ついにはエリーゼの妹の孫に辿りつく。そこにはエリーゼの生きた証、写真が残っていた！ 100年以上前に生きたヒロインへの熱い思いが、彼女の原動力であった。

離婚後、長く独身を通してきた

鷗外が再婚したのは12年後のこと。

エリーゼが結婚したのはその3年後、38歳であった。ふたりは長く互いの消息を知っていたのではと六草さんは論証。「鷗外とエリーゼ、このふたりにあつたのは、まさしく純愛だった」と述べている。

鷗外の次女的小堀杏奴もまた、『晩年の父』の中で次のように書いている。

「亡父が、独逸留学生時代の恋人を、生涯、どうしても忘れ去ることの出来ないほど、深く、愛していたという事実に心付いたのは、私が二十歳を過ぎた頃であった。

そう考えるようになつた原因の一つは、死期の迫つた一日、父が、母

に命じて、独逸時代の恋人の写真や、手紙類を持って来させ、眼前で焼却させたと、母が語つてくれたからである。」

明治の文豪として押しも押されぬ鷗外だが、生涯秘めた思いを抱えていたのだ。

その鷗外が、2度にわたってこの街を訪れていた！

旧上村旅館の佇まいは、そこに悩める若き日の鷗外がいるかのようだ。

海野 郁

（参考文献）

『鷗外選集 第二十一巻』岩波書店

『長野県文学全集 第1巻 明治編』（1）随筆・紀行・日記編』

郷土出版社

『森鷗外「北游日乗」の足跡と

漢詩』安川里香子著 審美社

『鷗外の恋 舞姫エリスの真実』

六草いちか著 講談社

『それからのエリス いま明らか

になる鷗外「舞姫」の面影』六草いちか著 講談社

『晩年の父』小堀杏奴著 岩波文庫

*『舞姫』を読むなら、『現代語訳 舞姫』森鷗外著・井上靖訳ちくま文庫がお薦め。井上靖の名訳で、原文や資料も収録されている。

ぶらり散策

大蔵京古墳を訪ねる

国道18号線上田バイパス入口上塩尻の交差点から500mほどの所に『大蔵京古墳』の案内板が見える。案内板に沿ってわき道に入り、見上げるとすぐに朱色の鳥居が現れ、急な石段を登るとその奥に豊秋霧原塼神社がある。この社殿は江戸時代に造られたもので、古墳は神社の社頭にある。古墳の築造年代は4世紀末から5世紀前半頃とされ、このあたりでは最古級とされている。



所在地は上田市秋和1391。北側にそびえる虚空蔵山(こくぞうさん)南麓の斜面に自然の地形を生かして造られている。墳丘は方墳で、東辺32m、西辺34m、南辺35m、北辺33.5mである。四辺は東西南北の方位にほぼ正確に一致し、墳頂部は各辺8mあり、高さは6mの比較的大きな方墳といえる。墳丘の東北部にある窪地は周溝の跡と考えられるが、それ以外の周溝、周堤などの施設は初めからなかったとのことである。古墳の頂部には

日露戦争戦没者忠魂碑などが建てられているが、墳形を変えていないので保存状態は良好といえる。昭和44年5月9日上田市の市指定記念物(史跡)に指定された。

この高台から見下ろすと、18号線バイパスを引きも切らず車が往来する。どれだけの人がこの古墳に気づいているだろうか。もし気づいたらぜひ一度立ち寄ってみてほしい。神秘の世界がここにあり、悠久の歴史が見えてくるから。

このバイパスができる時、一度は削られることになったこの大蔵京古墳。今ここに存在することの意味を心に止めてほしい。(萌)



豊秋霧原塼神社鳥居

上田情報ライブラリーでは今…

「真田氏の真実にせまる！」

～第8回 考古学からみる上田城～



ひのもといち つわもの
日本一の兵と呼ばれ、「義」に生きて果敢に散っていった真田幸村（信繁）。彼を取り巻く真田一族についてはミステリアスな部分が多く、それがまた魅力のひとつとなっています。新春1月、NHK 大河ドラマ「真田丸」の放映が始まりますが、どんなストーリーが展開されていくのか、注目が集まっています。

現在、上田情報ライブラリーでは、「真田氏の真実にせまる！」と題して、全11回の学術講座を開催中です。これまでに多くの言い伝えがある真田氏の実態が、真田氏研究の先端を担われる先生方によって、新しい資料の発掘と新しい視点から見直されようとしています。

第1回から第9回までは、寺島隆史さん、尾崎行也さん、栗原修さんにより、古文書などの資料から歴史をたどり、第10回を宮本裕次さん、最終回を丸島和洋さんと、残すところ2回となりました。そんな中、今回は第8回「考古学からみる上田城」和根崎剛さんの講座をご紹介します。

11月28日（土）パレオビル2階の会議室には、真田氏の歴史に関心を寄せる人々が大勢集まりました。「これまで古文書から真田氏をひもといてきましたが、今日は発掘調査からみた上田城についてお話をさせていただきます」そう挨拶されたのは、上田市教育委員会で上田城の発掘調査や復元整備を担当している和根崎剛さん。教育委員会に席を置くも、発掘現場に出ていることが多く、ほとんど不在とのこと。講師の依頼を受けたときは、とても戸惑ったそうですが、講座の趣旨に沿って今回は考古学からの視点、土の中から見えてきた上田城に焦点を当て、先週まで行っていた発掘調査の成果も発表、というので会場はザワザワ……。もしかしたら何か特ダネが聞けるのでは？ と期

待を寄せたのはいうまでもありません。

「発掘調査というと、みなさんはどんなイメージをお持ちですか？」
そう和根崎さんに聞かれて、皆さんの頭に浮かんだのは、社会科の教科書に載っていた縄文土器や土偶の数々、そして世紀の大発見？？

和根崎さんは続けます。「土器の発掘、文字のない時代の遺物を掘り出していく……。確かにそんな場面もありますが、私の場合、20年以上も発掘をしていますが、大発見に至るという場面に当たったことがないのです。発掘作業の中で、もしかしたら、これは江戸時代の遺構では？ と期待に胸躍らせながら掘り進めたところ、石の周りから昭和時代のコーラの缶や茶碗が出てきた……なんてこともあります」。

会場は一気に和やかになりました。大変な根気が必要とされる地道な作業の繰り返しなのですね。残念な結果になることもあるが、古文書からは読み取れないものがあるのも魅力のようで、さまざまな角度から検証していくことが大切なのだと教えていただきました。

また、現在上田城周辺で行われている駐車場や多目的広場の造成工事にも触れました。上田城は史跡であるため、工事を行う際は事前に発掘をして地下の調査をしなければならないとのこと。今回の発掘作業では、江戸時代のお堀の斜面が出てきたそうです。貴重なお城の痕跡が見つかった場合、後世に上田城を伝えていくため、何がどこにあるかを確認してから埋め戻し、大切に保存しているとのことでした。

このように上田城で発掘調査が行われるようになったのは、まだ日は浅く平成初めころからだそうです。この学術講座の中でも、さまざまな先生方が真田氏の魅力や逸話について語っています。民衆との強い絆で、家康の大軍を2度にわたり撃墜したにもかかわらず、親子離れ離れの状況に追い込まれてしまった真田親子。

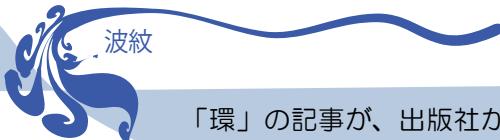
地元民としても、過酷な時代を生きた武将真田氏について強く興味を搔き立てられます。調査も引き続き行われ、さまざまな分野から事実が解明されていくことでしょう。



講師 和根崎剛さん

そして、各地から訪れた多くの観光客を空の上から眺めながら、昌幸たち親子が「ホントウハナ……」と嬉しそうにニヤニヤ笑っている気がしてならないのです……。

平成27年11月28日取材 望月 聰子



「環」の記事が、出版社から図書館に2冊の本を橋渡しました。橋渡しをしたのは20号に掲載した「上田情報ライブラリーでは今…」の「朗読による祈り」の記事です。この朗読会は花嶋尚美さん代表の「おりづるの会」が昨年8月に上田市の情報ライブラリーで開催したもの。「おりづるの会」は「この地球から核兵器をなくし平和な未来を」と願いながら長野県内の公民館などで朗読を続けています。

この記事を、長野市の龍鳳書房代表取締役で、「環」に安曇族に関するシリーズを寄稿していただいている酒井春人さんが読み、「小社で出版した広島長崎の原爆に関する本を、図書館とおりづるの会に寄贈したい」とのお申し出がありました。

本のタイトルは『花びらのような命』。この本は長崎の被爆俳人松尾あつゆきの遺稿集です。妻と子どもを原爆で亡くした松尾は、長野県に来て、屋代高校などで教壇に立ち再び長崎に戻りました。そのときの教え子、長野市の竹村昌男さんが、松尾の全俳句と長崎の被爆体験記を一書に編んだのです。「この本に収めた『日記・原爆前後』と『原爆療養記』はぜひ朗読の会でご紹介いただきたい。亡骸を学校の校庭で焼きながら、その時に流れた天皇の玉音放送を詠んだ『降伏のみことのり 妻を焼く火いまぞ熾りつ』や『なにもかもなくした手に四枚の爆死証明』は、松尾の無念さを感じずにはいられません」と酒井さん。また「憲法違反の無法な安保法案が通り、満腔の怒りを覚えていますが、こうした負の歴史を再び繰り返すのか」と話されます。

寄贈していただいた2冊の本は、一冊は上田情報ライブラリーへ、一冊は「おりづるの会」へお渡しました。一人でも多くの方に読んでいただけることを願っています。

(木漏れ日)

観点

イタリアの街角

四年に一度、欧州で開催され、信州大学纖維学部も出展している国際纖維機械見本市を訪問した。今回の開催場所は、つい先日まで、ミラノ万博が開催されていた場所でとにかく広い。ビックサイトの3個分以上はゆうにありそうだ。今回の見本市もそうだが、衣食住の衣の分野に先細り感はない。スパイダーシルク、ナノファイバー、環境負荷低減素材などの新素材と、これらに不可欠な製造機器関連等の新たなイノベーションの幕開けも近い。日本の誇るホールガーメント編機の島精機やインクジェットのミマキエンジニアリングのブースも連日大賑わいだ。信大纖維学部の先端研究を活かした新産業創出や、織り編み染めといった古来伝統技術の革新的な技術発展等、上田地域が世界を牽引できる産業分野であることは間違いない。

さて、話は変わるが、「デザートの国イタリアに行ったら、蓋を閉めているジェラート屋のジェラートを食べてごらん。」イタリア国家から文化勲章を授かり、ARECのコーディネーターも務めてくださった故 岡本三宜先生から、10年前に受けたアドバイスである。「温度管理と酸化防止を気にかけているお店ですよ。」とのこと。その



アドバイスを受けて以来、イタリア訪問の際には、蓋探し!?が楽しみに。今のところ、ミラノ繁華街では、地元の高級食材スーパー(PECK)の中に1店、フィレンツェ繁華街では2店しかまだ見つからず。蓋が閉まっていると、ジェラートの色彩の華やかさは見えないけれど、味と舌触りは格段に上質だ。ジェラートを楽しんだ後は、イタリア製のマシーンと蒸気扱いの職人技から生み出される極上のエスプレッソ。ジェラートとエスプレッソを合わせて、3ユーロ(400円)で楽しめるイタリアの街角は魅力的だ。



一般財団法人浅間リサーチエクステンションセンター
センター長・専務理事
信州大学繊維学部 特任教授 工学博士 岡田基幸

おもしろWeb

信州上田観光おもてなしサイト 「うえだで!!」
<http://www.uedade.jp/>

上田の観光ポータルサイトです。

- 真田の郷・上田(真田三代の歴史、大河ドラマ真田丸関連情報、上田の観光巡りツアーなど)
- 上田の旅ガイド(まち歩きマップ、宿泊温泉、グルメなど)
- 旅のお役立ち情報(駐車場コインパーキング、交通移動、公衆トイレマップなど)

あとがき

昨年10月発行の第20号で「環」は5周年を迎えた。準備段階での喧々諤々や創刊当初の試行錯誤を思い起こすと感慨深いものがある。

サブタイトル「千曲川地域の人と文化」に基づいて、この5年間に取材で訪れた図書館や美術館は41館、芸術家や起業家、シニアは35人、「観点」で紹介した国や施設は18か所、寄稿くださった方は11人、合計105に上る。「環」は毎号5人と新たな出会いを持ったことになる。取材で接したユニークな個性や貴重な経験は、「環」を一回り大きくしてくれた宝ものになっている。

5周年を機に実施したアンケートでも、「内容がバラエティーに富んでいて楽しい」「表紙や文中の写真がきれいで読みやすい」「知り合いが掲載されていて親しみがわいた」など、好意的な意見が多かった。これらを支えに、平均年齢65歳のスタッフ7人、スクラムを組みなおしたところである。（木漏れ日）



KAN
環 千曲川地域の人と文化 第 21 号 ゆずりは
2016 年 1 月発行
NPO 法人上田図書館俱楽部
電話 /FAX 0268-25-3115 info@zuku.jp

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます。

環スタッフ：伊藤文子 海野 郁 西入幸代
宮下明彦 望月聰子 矢幡正夫 吉池みどり